

米代川流域における舟運によるまちの変遷 ―能代・二ツ井を例に*―

A Historical Study on Shipping on Yoneshirogawa River and the Progress of Town Formation

菅原恵介** 川村公一*** 清水浩志郎**** 木村一裕*****

By Keisuke Sugawara, Koichi Kawamura, Koshiro Shimizu, Kazuhiro Kimura

論文要旨

江戸期から明治にかけて、舟運によって栄えたまちは数多くある。しかし、その多くは米（廻米）の輸送を中心とするものであった。その中で、上流の豊富な木材（天然秋田杉）と鮎山物を主要物資としていたのが米代川舟運である。支流の藤琴川と阿仁川が本線と合流する地点には、加護山精錬所が立地され、当時の最新技術を用いて藩財政に莫大な利益をもたらした。そこでは鮎夫やその家族がまちを形成し、賑わいをみせた。物資が川を下ることで流域には舟着場が発達し、人と物の流れの中でまちを形成していった。本研究では、物資の集散地で賑わった『能代』と、主要舟着場として発展した『二ツ井』を取り上げ、舟運がまちの形成に与えた影響を考察するとともに、物流ルートから見てきた藩境を越えた交流にも着目し、米代川を媒体とした流域のまちの変遷について考察するものとする。

1. はじめに

米代川流域のまちは、舟運を背景に多くの人と物資で賑わった。しかし、明治 38 年の奥羽本線全線開通を期に、物流の転換を余儀なくされることとなる。この米代川流域のまちの中から、港町であり物資の大集散地として賑わった能代と、阿仁川・藤琴川という二つの支流を背景に中流域の主要舟着場として賑わった二ツ井において、その発展過程にどのような特徴が存在するかを明らかにすることは、舟運によるまちの形成を理解するうえで重要である。

本研究では、この二つのまちの発展過程を時間の流れに沿って、変遷という形でみていくために、年表作成を根拠とし、それを基にまちの変遷について考察していくものとする。年表作成にあたっては、それぞれの発展過程における時代背景に合致した項目に着目するものとする。また、古地図等からみるまちの変遷にも着目する。

2. 米代川舟運の特徴

(1) 米代川舟運の概要

米代川は、その源を秋田・青森・岩手県境に位置する中岳（標高 1,024 メートル）に発する。その流れは岩手県を南下し、その後、向きを西に変えて秋田県に入り花輪盆地を北に流れ、右支流の大湯川と合流したあと再び流れを西にとり、大館盆地を貫流し、鷹巣盆地を経て、二ツ井町付

近で支流最大の流域面積を持つ阿仁川や藤琴川などの大小の支流を合わせて、能代平野を流下して日本海に注いでいる。その幹線流路延長が 136 キロメートル、流域面積 4,100 平方キロメートルの一級河川である。東北でも有数の大河川で、秋田県でも南の雄物川と肩を並べるほどである。

(2) 他主要河川の特徴

a) 米代川の位置づけ

米代川舟運の特徴を明確化するために、東北地方の主要河川を統計比較する。東北地方では流域面積で第 5 位、幹線流路延長でも同じく第 5 位と比較的大きな河川として位置づけられている。（全国の河川と比べると、流域面積では、第 14 位、幹線流路延長では第 30 位となっている。）東北地方の河川にみる米代川の位置づけを図-1 から見る事ができる。

b) 流域の発展形態

次に、東北地方の主要河川における舟運による流域のまちの発展形態について、対象としたのは秋田県三大河川の雄物川（秋田）、子吉川（秋田）と、北上川（岩手～宮城）、最上川（山形）の 4 河川である。文献からまとめた表を表-1 に示している。

どの河川の流域のまちも主に舟着場として発展を遂げていることがわかる。運搬された物資はその土地の特産物

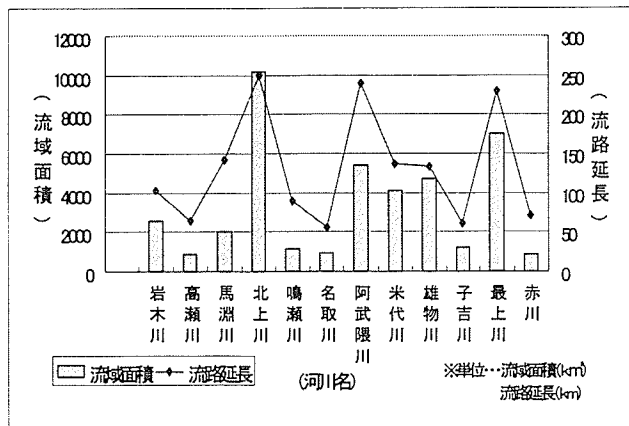
*keywords : 江戸期、舟運、能代湊、鮎山町

**正会員 (社)東北建設協会秋田支所 (〒010-0951 秋田市 山王四丁目 4-31 tel.823-3148)

***正会員 国土交通省東北地方整備局秋田工事事務所

****フェロー会員 秋田大学 土木環境工学科

*****正会員 博(工) 秋田大学 土木環境工学科



図－１ 東北地方主要河川の比較
(文献番号 1) より作成：菅原)

表－１ 主要河川流域における主な特徴 (作成：菅原)

特徴	雄物川	子吉川	北上川	最上川
舟運関係者が居住して賑わいをみせ発展	○	○	○	○
舟着場として発展	○	○	○	○
地の利に恵まれ発展				○
藩の境界や幕藩的役割を持ち発展		○	○	
関所 (番所・役所) として発展		○		
一つのまちが核となって発展				○
鉄道の開通により衰退	○	○	○	○

が多いが、主に年貢米や廻米などといった米がその大部分を占める。いずれも舟運による物資の交流によって商品経済が浸透し、それとともに情報・文化・信仰も伝達されたという記録がある。舟運が衰退に至った経緯においては、東北地方においてはいずれも鉄道開通による物資の輸送転換によるところが大きい。

各流域の特徴には、歴史的背景や地理的要因、主要物資、技術など様々な背景・要因が存在していることがわかる。

C) 米代川舟運の特徴

秋田県の三大河川は、北から米代川・雄物川・子吉川であり、これらの川は、古くから舟運が盛んであった。河口港として、野代港・湊 (土崎)・古雪港が物資の集積地となっており、藩政時代には、この港から日本海海運に連絡され、全国市場と結びついていた¹⁾。

南の雄物川・子吉川の舟運は米が主体であった。米代川

では、支流の藤琴川・阿仁川・早口川・長木川・犀川などの流域の山々が、本流と同様に天然秋田杉の宝庫であった。また、太良鉛山・阿仁銅山・早口金山・赤沢金山・大葛金山など有力な鉱山を有していた¹⁾。これらの後背地をとりまく環境から、米代川の舟運は《銅と木材を主体とする》ものとして特徴付けることができる。

米代川は、中世から藩政時代・明治時代にかけては、銅や秋田杉・生活物資などを輸送する舟運の大動脈であった¹⁾。流域の中心集落には定期市場が開設されたため、市場に物資を供給する市掛船が開設日を異にする各市場を廻ったことや、郵便船が能代・大館間を上りは2日、下りは1日の時間を費やして往復していた³⁴⁾。

街道が十分整備されず貧弱だった当時は、大量物資の輸送手段は陸上輸送よりも舟運のほうが、より効率が大きく適していたのである¹⁾。米代川舟運の主な物資をまとめたものが表－2である。

表－2 主な積荷 (文献番号 55) より引用)

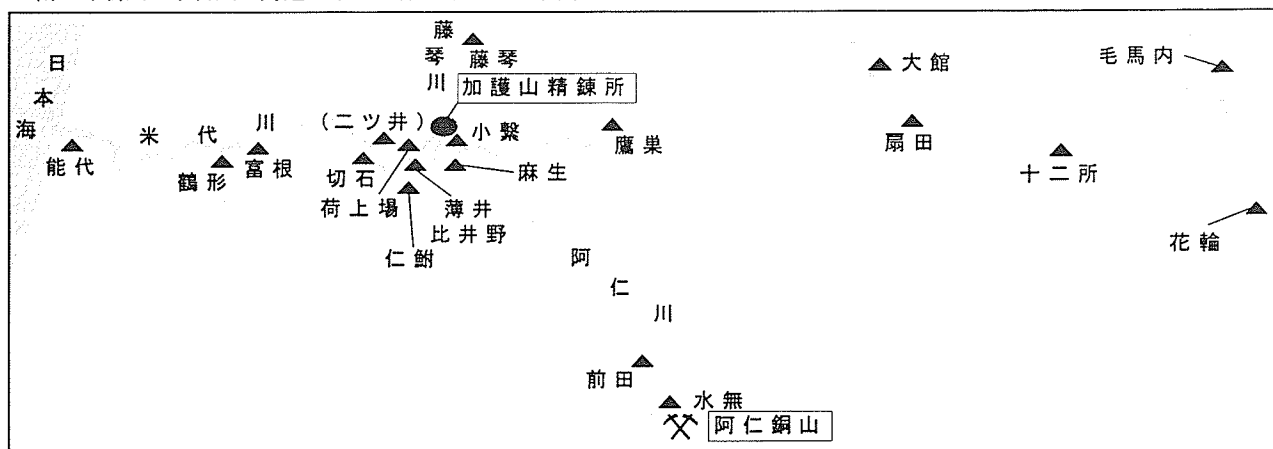
下り舟	粗銅 (阿仁鉱山・太良鉱山) 杉、米、石材、大豆、小豆、ゼンマイ
上り荷	綿、塩、古着、干魚、石炭、コークス、 石材など

3. 流域における能代、二ツ井の位置づけと舟運

(1) 能代の概要

能代のまちは、米代川舟運はもちろんのこと、河口港を背景として発展した。

能代は鉱業・林業に富む米代川流域の盆地を背景として、上方や松前 (北海道) を主な取引地としていた。物流による他藩との交易のため、人の往来の激しかった能代港は、物資の集約機能を一手に担い、大集散地としてにぎわった。また、港町としての能代は、進取的であり、積極的でもあり、また経済的にも強力であったため、藩という狭い垣根を越えて視野も広く、比較的自由な気分がただよっていた⁹⁾。また、港と流域の町々は米代川を媒体としてつながっており、能代港は上流の豊富な資源の恩恵を受け、上流の



図－2 米代川流域図 (作成：菅原)

まちは能代港から他藩の物資や文化を生活に浸透させていった。まさに能代は、米代川流域の玄関口といえる。(写真-1)

(2) ニツ井の概要

ニツ井地区は、米代川の支流阿仁川と藤琴川が、本川に合流してまもなくの所に位置する(写真-2)。この地区は豊富な秋田杉を中心に、支流阿仁川の銅などを物資とする舟運によって栄えた地域である。主要舟着場は『荷上場』で、米代川舟運の中継点として諸物資が荷上げされていた。江戸時代初期、秋田藩の財政を支えていたのは、藩内でとれる米、阿仁地方を中心に産出する金、銀、さらに秋田杉を中心とした木材である。佐竹氏の移封直後から、藩内の金山、銀山の開発には、大変な力が注がれた。



写真-1 米代川河口 『能代』(川村公一「米代川その治水・利水の歴史」1994年)



写真-2 米代川・阿仁川合流点付近(川村公一「米代川その治水・利水の歴史」1994年)

(3) 流域にみる産業の発展

米代川流域において、特に発展したのが木材・鉱山の産業である。前述のように、流域には天然秋田杉の宝庫である。戦国時代に入ってはじめてのうちは重要視されていなかった木材も、各地で築城などが始まり、その城下に大きな集落が作られるようになっていくと、秋田の豊富な木材も注目されるようになった。秋田藩の木材収益は、寛文期に銀240~50貫程度であったものが、延宝6年(1678)には1000貫に及んだという記録もある。

また、鉱山資源も豊富で阿仁銅山に始まり、藩財政に大きく貢献したのが加護山精錬所である。

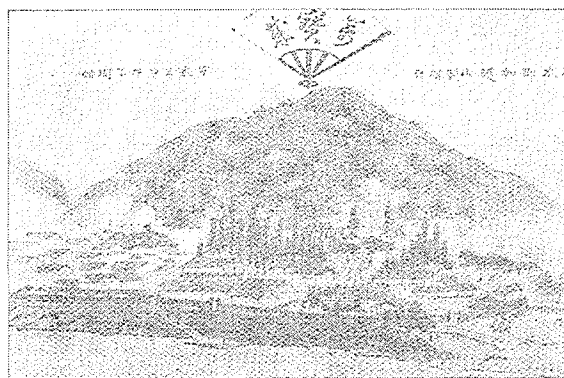


図-3 加護山精錬所絵図(「人づくり風土記」28)

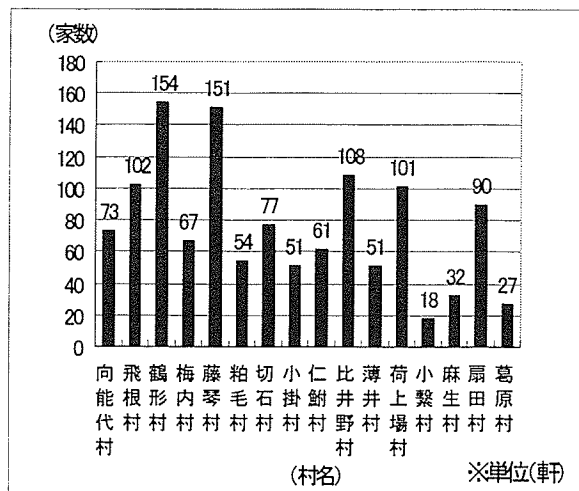
加護山は現在のニツ井町東部、米代川に北から合流する藤琴川西岸寄りに位置する。その東数キロの場所で阿仁川が米代川に合流している。このように水運の便利な場所が選ばれた(図-2参照)。阿仁銅山からは銀を含んでいる銅を阿仁川を下る舟で、藤琴川の上流にある太良鉱山の鉛を舟で運び、さらに阿仁川流域で不足していた薪・木炭・木材を藤琴川上流地域に求めた、まさに産業のコンビナートといえた。

加護山が選ばれた条件は、以下の理由からである。

- ①阿仁の粗銅を舟で米代川を運び下り、支流の藤琴川の合流点に近い加護山に運ぶのに便利である
- ②南蛮吹きに使う鉛を藤琴川の上流の太良鉛山から容易に運べる
- ③精錬に必要な炭、細炭が藤琴、粕毛にある藩の直山から得られる
- ④奥地の山間部から豊富な飲料水を得られる
- ⑤精錬した銀、銅を能代港へ川下げるのに便利である
- ⑥急流の米代川と藤琴川に囲まれているので、秘密を守りやすい(のちの藩は、ここを秘密の鑄銭場として使った)それまで藩財政を大きく支えていた木材資源の枯渇から、植林が盛んに進められるようになったため、藩としても鉱山物に頼らざるを得なかった。いかに加護山に藩が力を注いでいたかがうかがえる。

(4) 米代川舟運の流れ

図-2のように、河口港能代を中心としてニツ井・荷上場・鷹巣・米内沢・大館・扇田・十二所等の河港が立地し、200 俵積の大船は扇田まで通し、さらに小船は十二所を経て沢尻までのぼった。明治4年、毛馬内の鎌田安太郎、大館の佐々木久助などの尽力によって改修が行われ、花輪まで通航が可能となった³⁴⁾。この流域の米や鉱山物、秋田杉などは各地の舟着場(河港)を経て河口の能代まで送られ、帰り舟は流域の人々の生活物資や、鉱山での必要物資を運んだ⁵⁵⁾。また、図-4は流域におけるまちな家の数をまとめたものである。



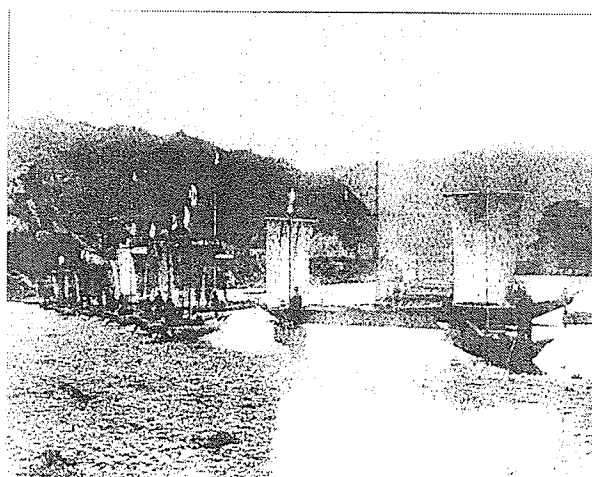
図－４ 享保 15 年 米代川流域におけるまちの家数
 (『六郡郡邑記』 pp.120～156) より作成：菅原

図－４から、鶴形村、藤琴村、比井野村、荷上場村が群を抜いているのが見てとれる。この村々はいずれも二ツ井地区に属しており、港町能代に劣らない賑わいを持っていたと考えられる。この村々の発展の背景には、合流点といった地理的要因や豊富な資源（鉱物）の他に、番所としての役割を担っていたこともある。

(5) 舟運に使用された船

この時代、陸路では羽州街道が整備されていたが、人の移動や廻米が主であった。木材や鉱物の大量輸送を担っていたのはやはり舟運である。産業発展の背景には舟運の存在が欠かせないことになる。ここで、船についてみる。

船は川の規模や積み荷の種類によって使い分けられた。中流から下流部で活躍した船は、細長く水切りに適した『長舟』と呼ばれた堅固なもので、図－５のような帆長大型船であった。一方、水深が浅く流量が少ない支流では、阿仁川で代表される『ジアイ舟』や船を２艘並べた『二ハイ舟』があり、小型なものであった。



中央で横になっているのが長舟
 図－５ 長舟とジアイ舟 (『米代川のあゆみ』⁵⁵⁾ より転載

表－３からもわかるように、こうした船を乗り継ぐ場所に舟着場が誕生していったわけである。積み荷は一度降ろされ、倉庫に保存されたりして次の船に積みかえられた。その間船頭たちは食事や睡眠をとった。こうしてみると舟着場は宿場町的な要素も大いに持っていたことがわかる。そこは住人の生活の場であるとともに、船頭や積み降ろしに携わる人々であふれ日々賑わっていた。この積み降ろしの過程が舟着場を発展させた要因のひとつとも言える。

表－３ 舟の概要 (『米代川のあゆみ』⁵⁵⁾ より)

種類	長 舟	ジアイ舟 (阿仁舟)
大きさ	長さ 18 m ～ 21 m 幅 12 m ～ 18 m	長さ 12 m ～ 18 m 幅 0.75 m ～ 0.9 m
運行地域	能代～荷上場、下田平、鷹巣、大館など	大館～花輪〔本流〕 荷上場～藤琴〔藤琴川〕 下田平～阿仁〔阿仁川〕
帆の数	7～13 反帆	1～3 反帆

※ 1 反帆＝木綿幅で 66cm、長さ 3cm ほどの布をいう。
 これを横に 3 枚縫い合わせて帆にした。

4. 能代のまちの変遷

(1) 古地図にみる能代

港町である能代には、多くの物資が集まった。そこで、船の監視や荷口銭を徴収するために『鶴形番所』という役所が置かれた。木材に関係したところでは、『木山方役所』や『御材木場』などが置かれ、まちの中でも重要な機能を有していた。港側にも移出入品を検査する『沖ノ口番所』と呼ばれる役所が置かれていた。

ここでまちの変遷を視覚的に見るため、現在の能代と図－６に載せた享保年間の古地図から主要機能の移動をみてみることにする。現在港は整備され、川の流れも大きく変わっている。神社の位置に変化は見られないが、町割りも大分変化をとげていることがわかる。

まちの形成をしてみると、舟着場から比較的広い道が縦に通じ、まちを横断するように広い道がいくつか通っている。まちの上流側、そして港側に役所に関係した機能が敷かれていることが伺える。本来、まちの中核的機能を持つ役所がこの時期にはまちの端に置かれていたことがわかる。藩財政をも支えていたほどの物資の流通が、まちの形成に大きく影響を与えていたことをはっきりとすることができる。

(2) 年表にみるまちの様子

表－４の年表に、全体の年表からいくつかまちに関する事象をあげると以下のようなものである。

a) 盛んに行われた町建て

秋田杉という産業を背景に、承応期 (1652) から元禄期 (1704) までのわずか 50 年余りの間に、11 町もの町が建てられている。一町当りの規模は定かではないが、この時代に、これだけ限られた地域での町建てとしては異例のことではないだろうか。

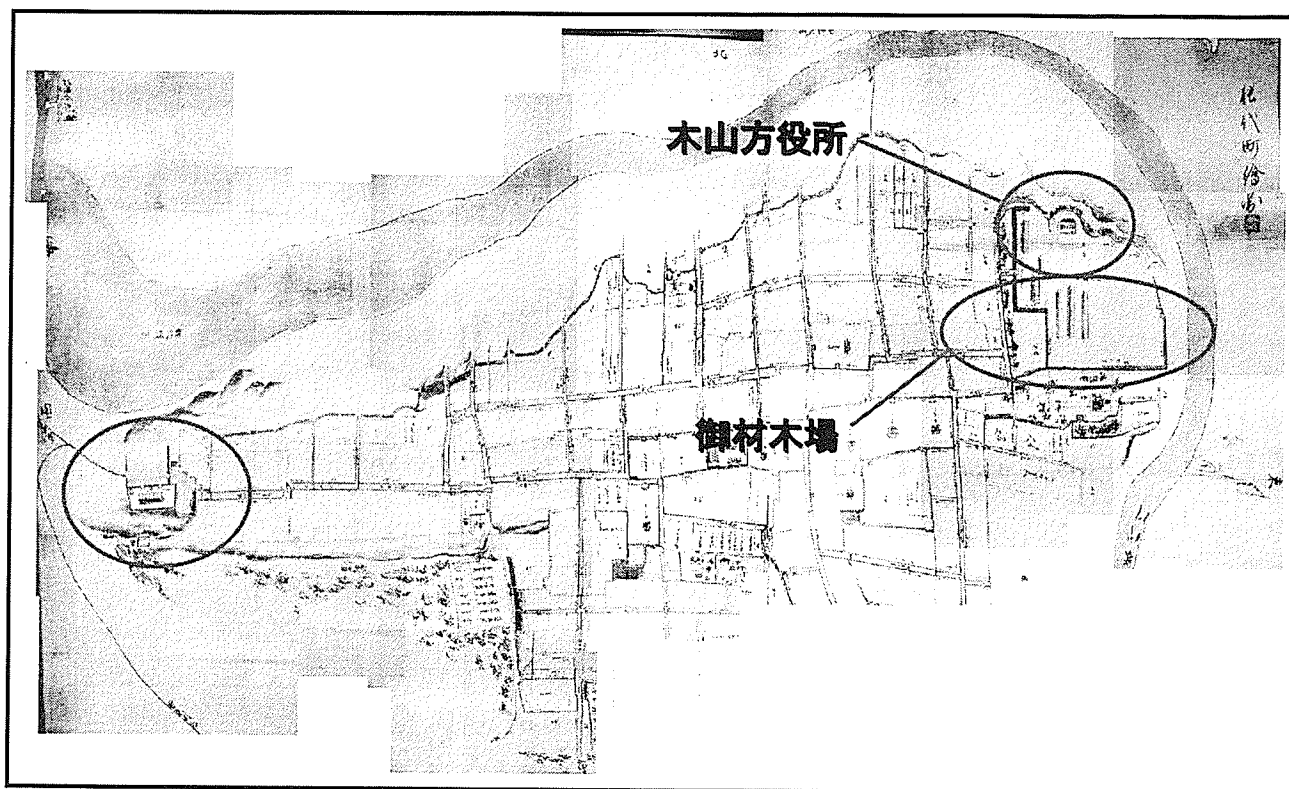


図-6 享保年間 能代町絵図 (秋田県公文書館収蔵 撮影、合成：菅原)

表-4 能代のまちに関する年表 (作成：菅原)

秋田氏時代	野代は、米代川と湊に関連して町建された在町で、秋田氏時代の野代は、清助町、後町、下川端町、大町、上町、万町、中町、の7町が町建てされている ³⁾
1652～1654 (承応期) 1661～1672 (寛文期)	能代湊が盛んになった。(この頃、町の建直しが始まった) ⁵⁾ →6町が町建てされる ³⁾²¹⁾
1681～1687 (天和期 ～貞享期)	秋田杉の輸送が多かった頃が絶頂期で、船の出入りも多く、従って問屋も増え、町の創設も盛んに行われた→1町が町建てされた ³⁾
1694 (元禄7年)	大地震に襲われる ²¹⁾ (被害状況)家数:720軒焼失、412軒(半)潰、土蔵:136焼失、26潰、死人:300人(内)男:127人、女:73人、米:14900石余焼失→藩の救済政策が成功、この年中に復興
1704 (宝永元年)	→1町が町建てされる(年中) ²¹⁾ 再び大地震に襲われる ²¹⁾ (被害状況)家数:758軒焼失、135軒潰、土蔵:61焼失、55潰、死人:58人(内)男:23人、女:35人、米:4755石焼失 →元禄7年の大地震以後、11年間でまちの殆どが再建されていた
1788 (天明8年)	幕府の巡見使随行古川古松軒の「東遊雑記」に「能代は400軒の大概のよい町で北国、九州、大阪の廻船も多数入港し商人多く豪家あり...」と ⁵⁾
1804～1818 (文化期)	20あまりの町を形成していたほどであり、定期市の開設より常設店舗や常市並びに特定市として、いち早く発展していた ⁶⁾
1820 (文政3年)～ 1833 (天保3年) に至る11年間	平均9000俵の秋田米が天津に廻米されている事から見ても、秋田藩と上方市場との関連は、第一に西廻り海運によって直接に連繫し、第二には、越前敦賀・若狭小浜を媒介として結ばれていた。 ⁸⁾
1830～1844 (天保年間)	米代川を利用した運搬物資をみると、米・大豆・銅・硫黄などを能代に出し、塩・松前物(水産物・水産加工物)・砂糖・日用品を上流各港に荷上げていたことが記載されている。従って、各河港には舟場集落が発達し、この地を拠点に、その後背地への物資供給地として、また、地場産物との交換地としても、市場開設の立地条件が整い、藩政期に既に定期市の開設が確認されているところである。 ⁹⁾

また、当時の勢いは災害復旧の記録から何うこともできる。能代では度重なる大地震により火事の被害が多かった。しかし、『わずか11年間の間に全ての町が再建されていた』という記録が残っている。その上、死者が300人(1694年大地震)から58人(1704年大地震)に減少しているのをみると、災害に対応した町建てが行われていたと考えることもできる。

b) 『風の松原』誕生

町建てが盛んに行われていた裏では、早いうちから山林保護育成が進められていた。加藤清右衛門景林(かげしげ)を始めとして、三度の林政改革を経て、長い年月に渡り植林活動が行われた。その結果、現在の日本海沿岸に位置する『風の松原』を誕生させることとなった。

c) その他

興味深い事柄としては、金毘羅神社の存在がある。船の神様を奉るこの神社は、『祭典日ともなると数千人の参詣客で賑わった』という記録も残っている。

5. ニツ井のまちの変遷

(1) 年表にみるまちの様子

a) 産業に依存したまち

前述したように、ニツ井地区の発展は豊富な鉱山資源とその地理的要因にある。産業を背景に発展した上流の町の多くは、鉱山町として形成された。『明治31(1898年)の記録だが、阿仁銅山には3000人余りの鉱夫と、その家族を合わせて1万人に上る人々が住んでいた』という記録もある。この記録からも、最盛期であった加護山精錬所運営期には、いかに多くの鉱山関係者がまちを形成していたか

がわかる。

b) 定期市の発展

鉾山町を背景に大きな発展を見せたのが定期市である。仕事を持ってそこに居住していた鉾山関係者や材木関係者が、船でわざわざ近くの大きな町まで買い物に出かけたとは考えにくい。鉾山町という需要があったからこそ、多くの日用品が川を上り、そこに定期市を発展させていった。水無には、『享保期（1716～1735）すでに130軒の市が開かれていた』という記録があり、『寛政期（1789～1800）にはその数も200軒にも達し、商人の出入りも旺盛であった』、という記録もある。また、享保19（1734年）の記録に、『今から260年以上前に二ツ井市場が開かれている』とあることから、二ツ井地区の流域のまちは、産業関係者でその大部分を形成し、そこに住む人々の日常生活の営みが定期市を発展させ、まちを発展させたと考えられることができる。

表－5 二ツ井のまちに関する年表（作成：菅原）

佐竹藩時代になり	荷上場でも定期市が開かれ活気づいていた ¹⁰⁾
17世紀中盤すぎ	乱伐によって林産資源の枯渇が目立つ→取引量減少 没落する木材問屋も出始める。このころ金銀山の衰退も 目立つようになり、藩財政に深刻な影響をもたらした ⁴⁾
1670 (寛文10年)	阿仁銅山の開発 ⁴⁾
1702 (寛文15年)	阿仁銅山藩直営となる ⁴⁾
1721 (享保6年)	秋田(阿仁)銅山、長崎御用銅割当高が全国の35%を 占める ¹⁸⁾
1716～1735 (享保年中)	水無は阿仁町の銀山町に連続する鉾山町であり、この 時期にはすでに130軒の市が開かれている ¹²⁾
1751～1763 (宝暦年間)	秋田杉が3分の1に減って藩の財政に大きな影響を及ぼ した ⁴⁾
1762 (宝暦12年)	民林の振興を主体とする →植林はいつこうに進ま ず逆効果...
1774 (安永3年)	加護山精錬所ができる ¹¹⁾
1789～1800 (寛政期)	水無の市はこの時期200軒に達し、鉾山労働者・銅山方 を相手とする商人の出入りも旺盛であった。それに、阿 仁川を利用した「阿仁船」と呼ばれた川舟の運航も注目 される ⁶⁾
1876 (明治9年)	比井野と薄井両村が合併して二ツ井村となる ⁶⁾
1897 (明治30年)	阿仁銅山の文明の発達著しく、この年には鉾山事務 所に最初の電話が開通 ⁴⁾
1898 (明治31年)	阿仁で最初の電灯が灯った ⁴⁾ 銅山の最盛期で、古 河工業では足尾銅山に次ぐ産出量を誇っていた ⁴⁾ 二ツ井舟場は水路と陸路の結節点として重要な役目を 担っていた。特に能代一大館間を往復する「郵便船」の 定日停泊地として知られていた。定期市が開かれ、ま ちは活気づいていた ¹⁴⁾
1902 (明治35年)	町制を施行して二ツ井町となった ⁶⁾

6. 両藩間における物流の特徴

文献調査から両藩間において物流が行われていたことは明らかである。そこにどれほどの影響が生じていたかは

まだ課題として残るが、秋田藩、南部藩における物流には、陸路・水路の二つのルートが存在することがわかった。ここで両ルートにおいてポイントとなる地点が扇田の舟着場である。陸路は街道・馬を使って、扇田を通して秋田に入った。水路においては米代川から扇田舟場に入り、能代から移出された。ただし、水路において米代川を利用できたのは水のはらない冬期以外の季節だけであった。冬期において、南部藩は北上川を利用していたことになる。

現段階では、ある程度の物資とルートしかわかっていないが、両藩間における物流にはこうした季節的要因や通行税、また過去の論争といった様々な因果関係が存在する。

7. おわりに

舟運とまちの形成の発展要因の関係を以下のように考察した。

(1) 能代の発展要因

年表から能代のまちの変遷をみたとき、その発展要因に港の機能が大きく影響していることは明らかである。どの時代においても、港を核としたまちの形成が見られた。その中で、港に出入りする物資が木材→鉾山物→日用雑貨と変化する中、まちをとりまく人々も変化していることがわかった。労働者のまちから商人のまち、といった性質の変化に伴いまちの性格も変わっていったと考えられる。

(2) 二ツ井の発展要因

二ツ井地区は、林業と鉾山を背景として栄えた地域である。ここにおいて支流の影響は大きいといえる。米代川の中流域に位置する二ツ井地区は、荷上場を中心にそういった支流から運ばれてくる物資の恩恵を受け発展していった。運ばれたのは物資だけではなく、定期市の発展や当時の山間部には考えられない最新技術なども入ってきた。そういった流域の地域を結びつけるためにも舟運の存在は欠かせないものであった。この地域においては、まさに発展要因となるべきものが全て揃っていたように考えられる。

参考文献

- 1) 川村公一：『米代川 その治水・利水の歴史』、無明舎出版
- 2) 秋田県：『秋田県統計書 明治31年』、秋田株式会社
- 3) 秋田県土木部：『秋田県土木史 第二巻』、(社)秋田県建設技術センター
- 4) 阿仁町：『阿仁町史』、阿仁町史編纂委員会
- 5) 秋田県土木部：『秋田県土木史 第三巻』、(社)秋田県建設技術センター
- 6) 仙道良次：『秋田県の定期市』、川井書店
- 7) 長岡幸作：『郷土史の窓 能代湊・桧山周辺史話』、北羽新報社
- 8) 秋田県：『秋田県史 第三巻 近世編 下』、(株)加賀谷書店

- 9) 半田市太郎：『秋田の歴史』，秋田県地域社会研究会
- 10) 秋田県二ツ井：『GURURI ふたついきみまち百科』
- 11) 二ツ井町町史編纂委員会：『二ツ井町史』，秋田県山本郡二ツ井町
- 12) 二ツ井町史編纂委員会：『菊池文書』，秋田県二ツ井町
- 13) 二ツ井町史編纂委員会：『秋林・田口文書』，秋田県二ツ井町
- 14) 松橋栄信：『米代川の舟運』，よねしろ書房
- 15) 野添憲治：『図説 秋田の歴史 上巻』，無明舎出版
- 16) 大館市史編纂委員会：『大館市史 第二巻』，大館市
- 17) 秋田叢書刊行会：『秋田叢書 第二巻「六郡郡邑記」』
- 18) 清水勝：『図説 秋田県の歴史』，河出書房出版
- 19) 北羽新報社：『能代港物語』，北羽新報社
- 20) 斉藤寅則：『鉾山と鉾山集落』
- 21) 能代木材産業史編集委員会：『能代木材産業史』，能代木材産業連合会
- 22) 秋田市役所土崎出張所：『土崎港町史』，(株)加賀谷書店
- 23) 長岡幸作：『郷土史の窓 能代湊・松山周辺史話』，北羽新報社
- 24) 今村義孝：『秋田県の歴史』，(株)山川出版社
- 25) 秋田魁新報社編集局地方部：『新あきた風土記』，秋田魁新報社
- 26) 樋口節夫：『定期市』，(株)學生社
- 27) 野添憲治：『思い出のアルバム』，無明舎出版
- 28) (株)組本社：『人づくり風土記』，(社)農山漁村文化協会
- 29) 秋田県立秋田図書館：『国典類抄 第十九巻 雑部二』，秋田県教育委員会
- 30) 森嘉兵衛：『舊南部藩に於ける天保度の大飢饉と其の対策』，岩手縣師範学校
- 31) 大藤時彦：『東遊雑記』，下中邦彦
- 32) (株)トレベルメイツ社：『秋田県風土記 歴史と人物』，秋田県書店組合
- 33) 能代市史編纂委員会：『能代市史稿 第三輯』，(株)東洋書院
- 34) 秋田県：『秋田県史 第五巻 明治編』，(株)加賀谷書店
- 35) 不明：『まちづくり』
- 36) 『能代の歴史話』，能代市
- 37) 『米代川 舟場（神社）・土場』，建設省東北地方建設局能代工事事務所
- 38) (社)東北建設協会：『能代工事事務所60年のあゆみ』，建設省東北地方建設局能代工事事務所
- 39) (株)北羽新報社：『能代のあゆみーふるさとの近代』，(株)北羽新報社
- 40) 秋田県の歴史散歩編集委員会：『新版 秋田県の歴史散歩』，(株)山川出版
- 41) 秋田県：『明治38年 秋田県第23回統計書 第4巻（勤業ノ部）』
- 42) 『享保年間 能代町絵図』，秋田県公文書館収蔵
- 43) 秋田県：『秋田県史 第三巻 近世編 下』
- 44) 田中久二男：『米代川風物詩 仁鮎の筏』，建設省東北地方建設局
- 45) (株)ぎょうせい：『流域をたどる歴史 二 <東北編>』
- 46) 『平成11年度 事務所変遷調査 報告書』，国土交通省東北地方整備局能代工事事務所
- 47) 『米代川水系河川懇談会 資料』，国土交通省東北地方整備局能代工事事務所
- 48) 斎藤寅則：『雄物川の河川交通』，建設省東北地方建設局湯沢工事事務所
- 49) 北上市立博物館：『北上川の水運』，北上市立博物館
- 50) 『最上川～歴史と文化～』，読売新聞山形支局
- 51) 『信濃川百年史』，建設省北陸地方建設局
- 52) (社)東北建設協会：『子吉川改修史』，建設省東北地方建設局秋田工事事務所
- 53) 北野進・是永定美：『利根川 人と技術文化』，雄山閣出版
- 54) 野本寛一：『四万十川民族詩』，雄山閣出版
- 55) 『米代川のあゆみ』，国土交通省東北地方整備局能代工事事務所
- 56) 不明：『秋田南部御境目御用覚書』
- 57) 不明：『舟場併郡方御用拔書』
- 58) 伊藤信：『秋田藩御境抛入日記』，無明舎出版
- 59) 半田教授退官記念会：『秋田地方史論集』，みしま書房